

○ ESC Congress 2026 MUNICH を終えて

この度、ドイツ・ミュンヘンで開催された ESC Congress 2026 に参加し、Clinical Cases のセッションにて発表を行う機会をいただきました。

○ ご縁と不安と

これまで3年間の学会発表のうち、8分の5が左室流出路関連、英文ケースレポートも左室流出路関連と、左室流出路に縁のある専攻医期間を過ごしてきました。

そして医師6年目の8月という節目に、欧州心臓病学会の舞台に立たないか？とお声がけいただきました。これもまた左室流出路関連の症例で、一つの大きなターニングポイントに感じました。「恥をかけるのは若いうちだけ」と背中を押されながら、松浦先生をはじめとする先生方のご指導のもと演題をまとめ、応募いたしました。

数か月後、採択通知が届いた時の喜びと同時に襲ってきたのは、とてつもない不安でした。そもそも初めての海外渡航であり、英語も受験以来。不安でいっぱいでしたが、ご指導いただいた先生方からの期待を胸に日々英語学習と発表準備に勤しみました。

○ 初めての海外

長時間のフライトは緊張もあり眠れず、ボロボロの状態でミュンヘンに降り立ちました。しかし、美しいミュンヘンの街並みが心と身体を癒してくれました。

○ いざ学会、そして発表

いざ学会会場に足を踏み入れると、そこはまさに世界中の心臓病専門家が集うフェスでした。これまで自分が目にしてきた世界の狭さを痛感しました。

私の発表は Clinical Cases Session ではありませんでしたが、HOCM（閉塞性肥大型心筋症）に対するペーシング治療について、症例を交えながらガイドラインの解説を行い、全世界へブロードキャスト配信されるという、非常にプレッシャーのかかるものでした。「このような若造が壇上に立って、全世界に向けて講釈垂れてよいのだろうか……」と怯みましたが、熱心にご指導くださった先生方の期待に応えるべく、持てる力をすべて出し切りました。

プレゼンテーション自体はなんとか無事に終えることができ、Chairperson から“good presentation”とお褒めの言葉をいただいた瞬間は、大きな安堵と嬉しさが込み上げました。一方で、質疑応答では広義な質問を受け、「相手が求めている本質をいかに見極めて答えるか」という課題も明確になりました。

世界レベルの最新知見に触れ、世界の舞台で戦うには自分がまだまだ未熟であることを痛感したと同時に、「今後は世界に向けて発信していきたい」という大きなモチベーションの転換点となりました。（不整脈専攻にもかかわらず、気づけば左室流出路狭窄の専門家のような経歴になりつつありますが……笑）

今後は臨床研究の分野にもさらに精進し、継続して国際学会での成果発表に取り組んでまいりたいと思います。

○ おわりに (Appendix)

学会の合間にはミュンヘンの街並みを歩き、異国文化に触れることができました。今回は同世代の若手医師が多く参加していたこともあり、どこか医局旅行のような雰囲気で楽しむことができました。これまでどこか恐怖心があり、「日本の中で閉じこもってればいい」と考えていた自分にとって、一步外の世界へ踏み出した体験は、これまでの価値観を大きく覆すものでした。学術的な知見を得ただけでなく、人生の大きな転換点となる貴重な旅となりました。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださり、演題作成から現地の発表準備に至るまで親身にご支援いただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。当科史上最年少という立場でこの大役を乗り切ることができたのは、ひとえに皆様のおかげです。

これから続く後輩の皆さんへ。国際学会への挑戦は、キャリアにおいても人生においても、間違いなく大きな意味を持つ体験になります。近年、当科では若手が積極的に海外で発表する良い流れができてきました。

ぜひ一緒に、宮崎から世界を視野に入れて一步を踏み出してみましょう。

